

「んう…っああ……、」

漏れ出す声を抑えようと身をよじれば、這わされた毛糸がゆるく肌に喰い込んだ。

少年は素肌を赤い毛糸で縛られ、畳に全裸で仰向けになっている。

縛られている、と言っても手足の動きに不自由はなく、胴にまるであやとりの模様のように、幾重にも長い毛糸を張り巡らされていた。

毛糸は、学校の教室で女の子たちのあやとりの道具になっているのによく似ている。そんなもので軀を縛<sup>いまし</sup>められていると思えば、年頃の少年としては気恥ずかしくないわけがなかった。

「ね…、ねえ兄さんたち、もう終わりにしない……？」

不安げに大きな瞳をゆらめかせる少年に構わず、いとこの兄たちはそれぞれの手を止めることはない。

「もーちょっと。これからがこの遊びのおもしろいところだから」

「そうそう。それに、負けたほうが勝ったほうの言うこと聞かなくて約束じゃん？」

「大丈夫大丈夫。そんな、痛いこととかじゃないから」

三人の兄たちは少年の心配をよそに、愉快そうな表情を浮かべている――。

昭和××年東京某所。五月下旬。

久々の連休をとった兄たちが彼らの実家に帰ってきていると聞き、少年は学校が終わると一目散にそこへ向かった。

商店街から少しはなれた場所にある、明治から続くこじんまりとした駄菓子屋。  
それがいとこの兄たち三人の実家だった。

「おお…！久しぶりだなあ！」

大きなボトルに入ったカラフルな飴玉や、キャラメル、ガムなどの箱が所狭しと陳列された店の奥から、兄の一人が出迎えてくれた。

伯父おじさんの座る勘定台の後ろに曇りガラスの嵌はまった引き戸があり、そこをがらりと開けると一段高い畳の間になっている。彼らとの遊び場は毎回この部屋と決まっていた。

「やあ、よく来たね。お正月以来かな」

「今日も兄さんたちといっぱい遊ぼうね」

他の二人も揃って、少年を五畳ほどのそこへ迎え入れてくれる。

この駄菓子屋は少年を含め、多くの子どもたちの行きつけだ。そんな店の奥に親戚のよしみで上がらせてもらうとき、少年はいつも言いようのない得意な気分になった。

兄たち三兄弟はみな二十代で、この町内でも有名な美丈夫<sup>び じょうふ</sup>だ。精悍ながらも目は優しく、親しみやすい雰囲気は老若男女に好評だ。「駄菓子屋の三兄弟」と言えば皆が口を揃えてほめちぎる。

そうした彼らの評判が、少年の得意な気分をより昂<sup>たかぶ</sup>らせるのは事実だ。が、少年が三兄弟に懐くのは彼らが実際に優しく、いい遊び相手になってくれるからに他ならなかった。

「今日は何をして遊ぼうか」

「メンコ？けん玉？……ああ、そうそう。双眼鏡もあるよ」

「双眼鏡！？」

少年は目を輝かせて身を乗り出した。

「うん。ちょっと二階へ取ってくるよ。あと、ドロップも」

「ラムネもあげようね。おーい親父、ラムネ四本こっちにおくれよ」

店先で冷やされていたラムネ瓶はガラスの表面にたくさんの水滴がつき、少し傾けると中でカラコロとビー玉が鳴った。まだ五月だというのに蒸し暑い今日のような日にはありがたい。

そうしてラムネ瓶片手に談笑し、兄の一人のバッジやペナントのコレクションを見せてもらったり、お待ちかねの双眼鏡を手にとらせてもらったり、メンコ遊びをしたりして時間を過ごした。

「あ～、やっぱり君は強いなあ」

「ふふ……っ。そうだ、勝った人は何でも言うこと一つきいてもらえるってのはどう？」

メンコ勝負で連勝した折、つい気が大きくなってそんなことを言った。

それは面白そうだという話になり、兄の一人と一対一の勝負をしたところあっさり負けた。

「う～ん、何でも言うこときいてもらえるとは言ってもなあ。何にしようか。……そうだ、新しい遊びに付き合っよ」

「新しい遊び？」

てっきり手持ちの強いメンコをくれだの大切にしている記念メダルをくれだの言われると身構えていた少年は拍子抜けした。むしろ、普段あらゆる楽しいことを教えてくれる兄の言う「新しい遊び」とやらが一体どんなものなのか気になった。そうして少年は内容も聞かず首を縦に振ったのだった――。

「…ああ…っ…、…ね、ねえ…、兄さんたち…そこ開いてるし、誰かに見られちゃうかも……」

赤い毛糸に彩られた裸体を、畳の上でくねらせながら少年は言った。

きめの細かい肌の上を、兄たちの手が這いまわる。

駄菓子売り場に繋がるガラス戸と戸<sup>とあ</sup>当たりとの間が数センチ開いていて、隙間から店内のチューブチョコと少年雑誌の置かれた棚が見えていた。曇りガラス越しには勘定台で新聞を読む<sup>おじ</sup>伯父の影もある。

「君が声を出さなければ、気づかれないよ」

服を脱いでと言われた段階で、なぜ警戒しなかったのだろう。

兄の言うことだしそんなに変なことでもないんだろうと、なされるがまま毛糸を巻かれていた数分前の自分を呪いたい。

「さっきも言ったけど、これからが面白いんだって」

「この遊びは、たぶん君のクラスでもまだ誰も知らないんじゃないかなあ」

「…そ…、なの……？…っああ、」

触れるか触れないかの加減で撫でられ続けていた乳首をきゅっつつままれ、びくんと<sup>からだ</sup>体が揺れてしまう。

「きっとそうだよ。この遊び知ってるって言ったら、クラスの人気者になれるかもね」

「…っあああ…、」

今度はゆるゆると上下に擦られていた脚の間のもをやんわりと五指に握り込まれる。腰が跳ねそうになるのをぎりぎりのところで耐えた。

何かとんでもなく悪いことをしているような気もするし、一人だけ裸であることやあられもない声を聞かれていることが単純に恥ずかしい。しかし親しい兄たちが相

手だからか、これといった嫌悪感はない。

疑いと不安が九割、未知への好奇心が一割。

まるで駄菓子屋のクジを引くときのように少年は思う。めったに当たらないと薄々知りながら、景品の玩具の豪華さに惹かれいつもなけなしの小遣いをはたいてしまう――。

「見つかったときは、兄さんたちが責任取るからさ」

「ぜんぶ『兄さんたちのせい』でオッケー」

そういう問題ではないのだがと思いつつ、やはりもう少しこのままでいいかと彼らを許してしまう。もしかしたら兄たちの言う通り、他の誰もまだ知らないすばらしい遊びなのかもしれない。そしてそれを知っていることを、明日級友に自慢できるかもしれない。

そうしたわずかばかりの自己顕示欲と好奇心に引きとめられ、少年はとくに抵抗らしい抵抗もせずにした。

しかし――

「んあっ…っ！？」

幼茎をゆるく握り込んだ手がゆっくりと上下され、腰が大袈裟に跳ねてしまった。

ずっとこうなりそうだったのを我慢していたのに——。

恥ずかしさに顔にかあっと血がのぼる。耳まで熱い。

兄の細長くも男性らしい五指にすっぽりと包まれたそこは、小さな生き物のように温かく脈打っている。恥ずかしさと緊張に高鳴る鼓動と同じ律動を刻むその感覚に、しだいに奇妙な疼きが混ざりはじめているのは気のせいだろうか。

「ん～？ねえ、もしかしてこういうの、自分ではしたことないの？」

「？…自分で？」

どうということだろう。

兄の一人に問われるも、意味がわからず答えに窮する。

もし一人でこんな恰好をして自らの躰をまさぐることを意味しているのなら、そんなわけないとしか答えられないが——。

「ああ、いいのいいの。初めてでぜんぜん問題ないから」

「……？」

兄たちの心なしか嬉しそうな表情が気になる。

「へえ？じゃあ気持ちいいとかも全然まだ知らないんだ？」

いちばん口達者な兄が言うのを、他の二人がおい、とかもう、とか言って諫めて  
いるが、やはり三人とも薄々楽しそうな雰囲気だ。

何のことかわからず、しかし次男の言葉にはうっすらいかがわしい雰囲気を感じ  
もする。そのなんとも言えない予感が、不安にも、そして好奇心にも繋がる年頃  
だった。

今度は明確に頷いてみせた少年に、兄たちがにこりと笑う。

「そうか〜。じゃあ今日はしっかりと教えてあげなきゃなあ」

「！んう……っ、あ、ああ…、」

親指と人差し指とで作られた輪に、幼い竿の根元からゆっくりと扱きあげられる。

兄の一人が言っていた「気持ちいい」というのはよくわからない。が、先程から躰  
を弄られるたびおかしい疼きに悩まされている。

「…ねえ……っ、なんか…、へん…なんかへんだよお…っ」

躰の内に這う妙な感覚はしだいに強まり、気づくと少年は半泣きになっていた。

兄たちを信じてみようと思ったばかりなのに、よくわからない刺激に翻弄され、ま

たたく間に心が揺らぐ。

「もうちょっともうちょっと」

大きな手にあやすように頭をなでられ、涙が引きかけたのも束の間だった。

「あああ…ッ！？！！、！」

考えもよらない場所に兄の手が及んでいた。

「何…ッ、」

思わず身を起こしかけた所を両側から押さえられる。

「肝心なとこほぐしておかないとね～」

こともなげに目の前の兄は言うが、その指はあろうことか少年の後孔に挿し入れられている。長い中指がゆっくりと肉襞をかきわけ、奥へ奥へと入ってくる。

「い…っ」